



意味拡張における二種類の方向性 : 着点動作主動詞と身体領域

夏, 海燕

(Citation)

神戸言語学論叢, 8:35-45

(Issue Date)

2012-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81003804>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003804>



意味拡張における二種類の方向性 —着点動作主動詞と身体領域—

夏 海燕

神戸大学大学院

1. はじめに

本研究では異なる身体領域による意味拡張の方向性の違いをみる。動作主の身体部位を着点とする動詞において、着点が手であるか、手以外の身体部位であるかによって、異なる拡張方向が観察される。手が着点になる動詞には、主語にとって有利な出来事へ、一方、手以外の身体部位を着点とする動詞には主語にとって不利益な出来事へ、という対照的な拡張方向が見られる。本研究では、それぞれの拡張方向を明らかにした上で、このような違いを導いた原因を探る。

2. 動作主の身体部位を着点とする動詞

他動詞の場合、動作は動作主から出発し、対象物をもって終結させるのがその典型である。力の伝達としては、動作主→(道具)→被動作主という流れである。(1)を Langacker (1990) の行為連鎖モデル (action-chain model) で表すと、以下のようにその方向性を明瞭に示せる。

(1) Floyd broke the window with the hammer.

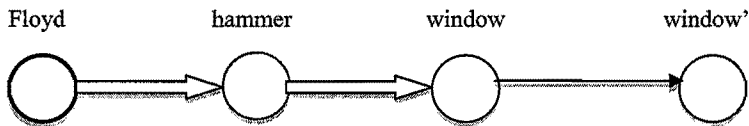


図1.(1)の行為連鎖モデル

しかし、一部の動詞は他動詞でありながら、動作主から出た動作は対象物に及び、最終的に動作主のところに戻ってくるという他動詞の典型から離れた意味の特徴を持つ¹。例えば、「食べる」という動作は、動作主が(箸やフォークなどの食器を使って)食物に働きかけることによって、食物は動作主に向かって移動し、動作の結果、対象物が動作主の身体部位である口(更に体内)に入る。この場合は、図2が示しているように動作の着点は動作主自身になる。

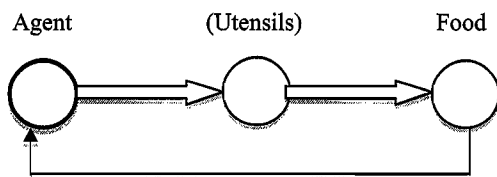


図 2. 飲食の行為連鎖モデル

本研究ではこのような動作主の身体部位が着点になる動詞に注目する。まずはこれらの動詞を、着点は手であるか、またはそれ以外の身体部位かによって、大きく2種類に分ける。そして、タイプⅡのほうは更に下位分類する。

タイプⅠ：手が着点になる動詞

とる、つかむ、つかまえる、とらえる、つまむ、持つ、握る、入手する

タイプⅡ：手以外の身体部位が着点になる動詞

- i. 着衣動詞²：着る、かぶる、こうむる、はく、まとう
- ii. 負荷動詞：負う、背負う、しょう、担う、担ぐ、抱える、いだく、だく
- iii. 摂食動詞³：食う、食らう、喫する、なめる、飲む、食べる、吸う
- iv. 感覚動詞：見る、聴く、嗅ぐ、会う⁴

以下では、このような2種類の動詞の意味拡張における方向性を検討する。第3節ではタイプⅠの、第4節ではタイプⅡの動詞の意味拡張を考察し、第5節では2種類の動詞の比較を行い、更に異なる拡張方向を引き起こす原因を究明する。

3. 手が着点になる動詞の意味拡張

手が着点になる動詞は、先ほど挙げたタイプⅠの「とる」「持つ」「つかむ」「握る」「とらえる」「つかまえる」「つまむ」及び「入手する」という8つの動詞が挙げられる。これらの動詞の意味拡張を観察すると、以下のような拡張方向が見られる。

方向①：＜手で物を獲得する＞ことから＜ものを自分の所有にする＞ことへ

＜物が手元にある＞ことから＜自分が所有する＞ことへ

方向②：＜手で物を獲得する＞ことから＜理解する＞ことへ

以下では、これらの拡張方向について、詳しく見ていく。

3.1. ＜手で物を獲得する＞ことから＜ものを自分の所有にする＞へ／＜物が手元にある＞ことから＜自分が所有する＞ことへ

タイプⅠの動詞は、「つかむ」「つかまえる」「とらえる」「とる」「入手する」には＜自分の所有物にする＞、「握る」「持つ」には＜所有する＞という拡張義を持っている。

3.1.1. 「つかむ」「つかまえる」「とらえる」「とる」「入手する」

例えば、「つかむ」は＜対象物に向けて手を伸ばし、五指を内側に折り曲げながら力を入れ、対象物を獲得、または保持する＞という基本義から、(2)のように、＜機会など人から逃げてしまうものに積極的に働きかけ、獲得する＞という意味へと拡張をしている。

(2) {大金／証拠／情報／機会／成功／幸運／良縁／幸せ／タイミング}をつかむ

この意味で使う「つかむ」が取る目的語に関して、国広(1975)では「普通はなかなか入手しにくい、追求の対象」であると指摘している。「幸せを逃す」「チャンスを逃す」「タイミングを逃す」などがあるように、目的語にくるのは、しっかり「つかまない」と逃げてしまうものが多い。

そして、「{機会／証拠}をつかまえる」、「{チャンス／機会／情報}をとらえる」などの言い方から分かるように、類似する意味拡張は「つかまえる」と「とらえる」にも見られるが、現在ではこの意味での使用例は少ない。

- (3) そういう考えを持って、これからいろいろな機会をつかまえて粘り強く北朝鮮の当局と交渉してもらいたいと思います。(BCCWJ 国会会議録：第 139 回国会)
- (4) 各省設置法を新たに制定するという千載一遇のチャンスをとらえ、この際、設置法から権限規定を削除すべきであります。(BCCWJ 国会会議録：第 139 回国会)

「とる」は「{金メダル／休み／免許／資格／学位／天下／政権／(試験で)満点}をとる」のように、<〔主に自分が手に入れたい〕ものを〕特定の組織または個人から獲得する>という意味へ拡張している。

この意味で使われる際、「とる」は<特定の組織または個人から>という規定がある。例えば、「学位をとる」は所属する大学または研究機関から、「政権をとる」は与党から、というような意味特徴を持っている。これは先ほど挙げた「つかむ」「つかまえる」「とらえる」と異なる。したがって、この意味で使われる「とる」は「幸せ」など特定の存在場所のないものを目的語にとれない。

(5) 夢を取るか、普通の幸せを取るか。

(5)の「夢を取る」と「幸せを取る」は「夢／幸せをつかむ」と同じ意味にならず、<〔自分の夢と普通の幸せからどちらかを〕選ぶ>という意味になる。

「とる」に比べて、「つかむ」の目的語にくる「チャンス」や「幸運」などは存在場所がはっきりしないものである。なぜこのような違いが生じたかという、基本義で使われる時、「とる」は「(箸置きから)箸をとる」などのように、対象物は静止状態か、または固定している物が多い。それに比べて、「つかむ」、「つかまえる」、「とらえる」のほうは先ほど述べたように対象物は動いているものが多い。固定している物は元の場所が確認されやすいが、動いている物は元の場所が分からないか、確認しにくい。基本義に見られるこのような違いは拡張義においても保たれている。

3.1.2. 「握る」と「持つ」

更に、基本義において<動作主側への使役移動>という意味が薄い「握る」と「持つ」は、<物が手元にある>ことから<自分が所有する>へという共通する拡張方向が観察される。まず「握る」のほうには、<〔権力などを〕他人に奪われないように自分の支配領域に収める>という意味が見られ、「持つ」のほうは<所有する>という意味へ拡張している。

- (6) a. {政権／権力／主権／実権／権勢／支配権／主導権／政局の鍵}を握る
 b. {国内生産の要／証拠／相手の弱点}を握る
 c. {多大の利益／お金／財布のひも／家計}を握る

- (7) a. {別荘／大金／資格}を持つ
b. {稀有の高さ／威力／不思議な美さ／日本らしさ／競争力／自信}を持つ

「握る」と「持つ」は両方とも「所有する」という拡張義があるが、「握る」のほうは、＜他人に奪われないようにしっかりと＞、という対立視点がある。このような相違も基本義からきたものであると考えられる。「持つ」はただく対象物を手中に収めて保持する＞が、「握る」のほうは、＜五指を内側へ折り曲げ、手のひらと指で物を包み込むような形で、指に力を入れ、物に圧力をかける＞という意味で、所持物に＜力を入れる＞というのは、きちんと保持し、相手に奪われないようにという含意が読み取れる。このような違いは拡張義にも保持されている。

3.1.3. 比較

タイプⅠの動詞を全体的にいうと、「つかむ」や「とる」などは＜手で物を獲得する＞という意味から＜ものを自分の所有にする＞へ、「握る」と「持つ」には＜物が手元にある＞ことから＜自分が所有する＞へと意味拡張している。つまり、基本義に見られる使役移動の有無は拡張義にも反映されているということである。(8)と(9)を比較してみる。

- (8) a. 三年前に免許を取った。
*b. 三年前に免許を持った。
(9) a. 今免許を取っている。
b. 今免許を持っている。

(8a)は容認できるが、(8b)が容認できないのは、「取る」は＜所有していない状態から所有するようにする＞動作であるが、「持つ」のほうは、＜所有する＞そのものを表しているからである。一方、(9a)と(9b)は両方とも言えるが、(9a)のほうは「免許」をまだ手に入れておらず、獲得しようとしている動作を表しているが、(9b)のほうは「免許」を所有していない状態から所有している状態へという状態変化を表していて、それぞれ意味が違う。

このように、タイプⅠの動詞において、「つかむ」「つかまえる」「とらえる」「とる」「入手する」には＜自分の所有にする＞、「握る」「持つ」には＜所有する＞という拡張がある。更に、同じく物を手に入れる動作でありながら、基本義における細かい意味上の相違もそれぞれの拡張義に反映している。

3.2. ＜手で物を獲得する＞ことから＜理解する＞ことへ

「つかむ」、「つかまえる」、「とらえる」及び「とる」は、＜理解する＞という共通の拡張義を持っている。

まず、「つかむ」は、＜[容易に表面に現れない物事の要点や真実などを]理解する＞という意味へ拡張している。

- (10) {こつ／本質／気持ち／核心／要点／真相／現実／要諦／大意}をつかむ

＜しっかりつかまないと逃してしまう＞という意味特徴はここでも見られ、簡単につかめないものを目的語にとることが多い。

- (11) 教科書や授業だけでは見えてこない、条文の背後にある現実をつかむことができるため(後略)。
(http://hou.soka.ac.jp/three_course.html)
(12) その裏や真相をとらえようと、実際に付き合いを重ねていく中で、その事実をつかんでいきます。
(http://ameblo.jp/dupondt/entry-10560453202.html)

「つかまえる」は「つかむ」と類似の意味を持っていたが、今ではそれほど使われていない。『日本国語大辞典』には、以下の実例と共に、＜物事の意味や、他人の意図などを確かに理解する＞という意味を挙げている。

- (13) 天地自然の理といふものを、しっかりとつかまへて、是は斯うなうてはならぬ事と、みづからさし極むる程のこたへがない。(加藤祐一：文明開化)
- (14) なんだか要点が掴(ツカ)まへにくいやうで。(青空文庫 森鷗外：青年)

現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)にも少数ながら、以下のような例が見つかる。

- (15) 奄美なら奄美、沖縄なら沖縄という世界がもっていた全体像、実際に存在した現実をつかまえなくてはダメだと思いますね。
(BCCWJ 高良倉吉/谷川健一：沖縄・奄美と日本)
- (16) そういった琉球・南島社会のダイナミックな実態をつかまえるためには、やはり、それらをつないだ海上交通を重視していかざるをえない。(同上)

「とらえる」にはく[物事の本質・内容などを]理解する＞という拡張義がある。

- (17) a. 意味を的確にとらえる／特徴をうまくとらえる／文章の要点をとらえる
b. 事件の真相をとらえる／情報の本質をとらえる

一方、「とる」は＜理解したり、判断したりする＞という意味がある。

- (18) a. 文字どおりにとる
b. 事態／物事を悪くとる
c. 私は彼の言葉を不承知ととった
d. 冗談をまじめにとる

表1のように、「とる」が持つ＜理解する＞という意味は複合動詞の後項にも見られる。

表1. 複合動詞における＜理解＞を表す後項動詞「取る」

動詞	意味	例文
読み取る	a. 文章などを読んで、その意味や主旨を理解する	(19)
	b. 外面に現れたことから、本心などをおしはかって理解する	(20)
聞き取る	音声(言葉)からその内容を理解する	(21)
汲み取る	相手の心情や事情をおしはかったり、理解したりする	(22)

- (19) たった三行の短い文面から読み取れるのは、ざっとそれくらいのことである。
(BCCWJ 鈴木史楼：書のためのしみかた)
- (20) となると、相手の顔色や態度を見ながら性格を読み取り、そのつどそれに応じた出方で対処していかなければならない。(BCCWJ 上前淳一郎：人・ひと・ヒット)
- (21) はたして一度耳にして文意が聞き取れるか。(BCCWJ 長野正：日本語の音声表現)
- (22) 鑑賞の上からは格調に主力を置かずに着用者の意図を汲み取るか、作城の珍奇さを理解してやるべきであろう。(BCCWJ 笹間良彦：甲冑鑑定必携)

手の動作から＜認識＞への拡張は先行研究でも指摘されている。Sweetser (1990)では(23)のような例を挙げ、「物理的な手の操作」と「理解」との結びつきは極めて広く行きわたっていると述べている。

- (23) a. ラテン語の *comprehendere* <つかむ> からフランス語の *comprendre* <理解する> へ
 b. ギリシャ語の *katalambano* <つかむ> から *katalambaino* <理解する> へ
 c. 英語にも *grasp a concept* <ある概念を把握する>
 catch onto an idea <ある考えを理解する>
 gotcha (フランス語の *j'ai saisi* も) <把握している>

日本語においても、「つかみどころがない話」などのように、物理的接触を表す語が直接心理的プロセスを表すようになることもある¹ (杉山・深田 2003)。

しかし、このメタファーが「物理的な手の操作と理解」の間の写像関係であるかどうかは疑問である。少なくとも日本語に限ってみると、「物理的な手の操作」は起点領域として、適切とはいいがたい。例えば、「物理的な手の操作」といえる「握る」「持つ」、更に「触る」「なでる」などに<理解する>という意味への拡張が見られない。一方、<区別する>ことを「分ける」で表現したり、更に、「思い出す」、「思い起こす」、「思い返す」、「思い合わせる」、「思い浮かべる」、「思い描く」、「思い切る」、「思い詰める」など、思考活動を物体操作で表したりする表現が多くみられる。概念メタファーとして定着させるために、起点領域と着点領域の対応関係をより精密に規定する必要があると考えられる。

ここでは、《思考活動は物体操作である》という上位メタファーの下に、《理解は手による獲得である》という下位メタファーを設定する。これらのメタファーは、IDEAS (OR MEANINGS) ARE OBJECTS (Reddy 1979) という存在メタファーと平行している⁶。

ここまではタイプ I の手を着点とする動詞の拡張方向性を見てきたが、次節では、手以外の身体部位が着点になる動詞の意味拡張における方向性を検討する。

4. 手以外の身体部位が着点になる動詞

手以外の身体部位が着点になる動詞は、更に下位分類できると第2節で述べた。まずは着衣動詞、摂食動詞、負荷動詞、感覚動詞の各動詞類は具体的にどの身体部位に附着するかを明らかにする。

4.1. 各動詞の具体的な附着部位

着衣動詞は當野・呂(2003) が述べたように、“x causes y to move to z, where x = agent, y = clothes, z = body(part)”, つまり、<動作主 (= x) が衣服 (= y) を体(あるいは体の一部分) (= z) に移動させる>という意味構造をなしている。身体部位について具体的な考察を行った研究として、影山(1980) では着衣動詞の意味は次の3つの基準で特徴付けられると論じている。

- (24) a. 対象物が‘衣類’である。
 b. 特定の身体部分が関与する。
 c. (話者によっては) 特定の動作様態が要求される。

身体部位については、「はく」は下半身(影山(1980)では「足」という用語を使っている)に、「かぶる」は頭部に、「着る」は胴体にとそれぞれ衣類をつけるが、スーツのズボンをはいている時に、「スーツをはく」とは言えず、「着る」という動詞を使うことから、「着る」は必ずしも胴体に限定されているものではないとしている。スーツ、ワンピース、パジャマ、オーバーオール、フード(付き)ヤッケなどは「着る」を使うことから、以下のように、Gruber (1976) の ‘Principle of disjunctive delimitation’ を修正し、「特定項目優先の条件」を導入して分析を行った⁵。

- (25) 最小指定の条件を満たす2個の語彙項目P、Qが存在する場合、ある基本範疇についてPの指定の方がQの指定より多ければ、PがQに優先して語彙挿入を受ける。足だけの「はく」と頭だけの「かぶる」がより優先されるが、その以外の場合は「着る」の使用範囲になる。
(影山 1980:33)

つまり、頭だけが指定されると「かぶる」、足だけが指定されると「はく」が使用されるが、それ以外の場合（胴体のみ、胴体+頭、胴体+足）には「着る」が発動すると考えるのがよいとまとめている。

摂食動詞のほうは、動作主が飲食物に働きかけ、飲食物を動作主の体の一部である口に入れる。目に見える移動の着点は動作主の体の一部である口までであるが、実際に飲食物は更に体内への移動もある。

一方、負荷動詞は、「負う」「背負う」「しょう」と「抱える」「いだく」など、バリエーションに富んでいるが、その違いは主に附着する身体部位にある。「負う」は「荷物を負う」のように、＜背中に〔人やものの重みを〕うける＞という基本義を持っている。そして、「背に負う」という意味の「背負う」、更に「背負う」からきた「しょう」も基本義が同じである。これらの動詞と違って、「抱える」は背中ではなく、着点となる身体部位は胸であったり、脇であったりする。つまり、＜物を腕で囲むようにして胸で支えたり、脇の下に挟んだりして持つ＞のである。一方、「いだく」はく両腕を回して物を体の中心に支え持つ＞というのが基本義であり、対象物の着点は胸である。

最後は感覚動詞で、感覚動詞において共通の拡張方向が見られるのは視覚動詞である。視覚表現は虚構移動として議論されてきた（Talmy 1996, 2000, 松本 2004 参照）。視覚の成立には「光エネルギー→目→視覚野→連合野」という情報処理パラダイムが必須である。外界物質から反射された光が瞳孔を通して、網膜に達し、眼球の奥にある光受容細胞に吸収され、最初の光処理を始める。つまり、視覚において光の着点は目で、もっと正確に言えば光受容細胞である。

以上のように、手以外の身体部位を着点とするタイプⅡの動詞附着部位の詳細を明らかにした。

4.2. 意味拡張の方向性

タイプⅡの動詞には、＜主語にとって不利益が生じる＞という意味へ拡張する傾向が見られる（夏 2010）。例えば、着衣動詞の「着る」「かぶる」「こうむる」の3つは、ともに＜〔好ましくないことを〕身に受ける＞という意味に拡張している。

- (26) しかし自分が悪い覚がないのに、むやみに罪を着るなあ、どうしても己の性質としてできない。
(青空文庫 夏目漱石：坑夫)
- (27) このことを声高に申しますと、余計に不利益を被る、さらに偏見が拡散されるという悪循環に陥るために、あまり強調されてきておりませんが、このことで悩む人は今も少なくありません。
(BCCWJ 萱野茂・他：アイヌ語が国会に響く)

視覚動詞の「みる」も、基本義として使う場合は「テレビをみる」、「夜景をみる」などのように意味的に中立である一方、意味拡張に伴い＜〔ある出来事を経験する〕＞という意味で使う場合には、「〔憂き目／痛い目／ひどい目／辛い目〕をみる」や「〔ばか／泣き／地獄／恥〕をみる」などのように、「いい目をみる」のような例外はあるものの、共起する目的語のほとんどがネガティブなものとなる。タイプⅡの動詞の意味拡張における＜主語にとって不利益が生じる＞という意味は表2のようになる。

表 2. 各動詞の基本義・ネガティブな拡張義及びその使用例

動詞	基本義		拡張義	例
着る	{上半身に[衣類を]／体全体に[上下一セットあるいは上下一体の衣類を]} 身につける	→	[罪などを]自分の身に受ける	汚名、悪名、冤罪、災難、罪
被る	[帽子などを]頭部につける	→	[責任や罪などを]引き受ける、または身に受ける	悪名、罪、影響、水害、負債
こうむる	「カガフル」の転、「被る」と同義	→	[災害など好ましくないことを]身に受ける	打撃、不興、損害、圧迫、被害、戦災
負う	背中に[ものの重みを]うける	→	[負担・傷害・恨みなど心身的に望ましくない事を]身に受ける	責任、負担、債務、恨み、危険、困難、重傷
背負う	背中に[ものの重みを]うける	→	[負担などを]身に受ける	ローン、借金、罪、負担、不幸、責任、課題
しょう	背中に[ものの重みを]うける	→	[負担などを]身に受ける	負債、損害
抱える	物を腕で囲むようにして胸にだいたり、脇の下に挟んだりして持つ	→	[負担になるもの、厄介なもの、世話をしなければならないものを]自分の身に引き受ける	課題、難問、ストレス、赤字、悩み、借金
抱く	両腕を回して物を中にかかえこむ	→	[考えや気持ちを]心の中に持つ	不信、不満、不安、恐怖、恨み、悩み、疑問、反感
持つ	[対象物を]手中に収めて保持する	→	[責任や負担になることを]うける	責任、費用
食う	[食べ物を]口に入れ、かんで体内に送り込む	→	[攻撃などを]受ける	拳骨、叱言、不意打、小言、暗撃、理窟、罰金
食らう	[飲食物を]口に入れ、更に体内に送り込む	→	[攻撃などを]受ける	一撃、攻撃、説教、不意打、一喝、爆撃
のむ	[主に液体状の飲食物を]口に入れ、更に体内に送り込む	→	[望ましくないものを]妥協して受け入れる	条件、要求
喫する	食べる、飲む、吸う	→	[失敗や心理的な打撃を]受ける	惨敗、敗北、驚き、恐怖
舐める	[物の表面を]舌の先で触れる	→	[つらい事を]十分に経験する	辛酸、苦しみ、苦痛、苦勞、辛苦
見る	[事物を]視界に入れて目に映す/自ずと視界に入ってくる物事が目に映る	→	[いやな出来事を]経験する	禍、損失、不幸、失敗、憂目、泣き、辛い目
会う	お互いに対面して、[相手を]認識する/偶然出くわす	→	[いやな出来事を]経験する	いじめ、憂目、禍、被害、災難、事故、酷い目

5. 方向性の比較及び原因探求

第3節と第4節では、それぞれタイプⅠとタイプⅡの動詞の意味拡張をみてきた。二つの異なるタイプの動詞は意味拡張の方向において顕著な差が見られる。手が着点になる動詞は＜自分にとって有利なものを意図的に取り入れる＞という意味へ、手以外の身体部位が着点となる動詞は＜主語にとって不利益が生じる＞へとそれぞれ拡張している。つまり、前者は積極的に有利なものを取り入れるが、後者の場合は不利益なものを抵抗できず、受け身的に受けざるを得ない。

手以外の身体部位を着点とする動詞が＜主語にとって不利益が生じる＞というネガティブな意味へ拡張するのは、基本義に見られる「主体領域の侵害」、及び意味拡張における「意図性の消失」という二つの側面から考えられる（詳細は夏 2010 参照）。

タイプⅡの動詞は、基本義において、＜主体領域外に存在していた事物が主体領域内に入ってくる＞という共通の意味要素を持っている点が指摘できる。更に、タイプⅡの動詞のうち、「見る」と「会う」は基本義において意図的事象でも非意図的事象でも使えるが、それ以外の動詞は何れも意図的事象を選好する。しかし、動作主が意図的に対象に働きか

けるプロセスが意味拡張において薄まることが観察される。残るのは、＜対象物が動作主の領域に入ってきて、動作主が移動の影響を受ける＞という結果的意味要素である。主体領域外に位置する事物が、主語が非意図的な状態である場合に主体の快適領域内に入ってくるという事象は、主体にとっては領域の侵害であり、縄張り意識が作動した結果＜被害性＞の意味合いが生じると解釈される。

一方、手が着点となる動詞は＜自分にとって有利なものを意図的に取り入れる＞というポジティブな意味へ拡張している。手も自己領域に属するものであるが、なぜ他の身体部位と異なる拡張方向が生じたかという、それは身体部位における手の能動性・優位性から考えることができる。

手は物理的な環境との意図的なふれあいの中で、一番重要な器官であり、もっとも用途の広い道具と見てよい。触覚の器官以外の全ての感覚器官は、人間より動物のほうが有能であると指摘され、例えば、ワシやタカ、ガゼル、ネコ族の眼の完成度、猛禽類やイヌ、オオカミ、ハイエナでは嗅覚が驚くほど鋭い。しかし、手による触覚だけは、人間がほかの動物に対する優位性を持つと指摘されている (Bell 1833)。人類の進化も上肢の自由化が伴っている。歩行の道具から生産の道具にかわり、手の働きが重要になってくる。「手」は、(28) のように人間にとっての重要性が窺い知れる。

- (28) a. <その動作をする人> : 嫁のもらい手、語り手、聞き手
- b. <労働力> : 人手が足りない、女手一つで子供を育て上げる
- c. <取りかかる> : 手を付ける、着手する
- d. <所有範囲> : 人の手に渡したくない
- e. <支配> : ライバル会社の手の者、犯人の手から人質を救う
- f. <手段> : 手を尽くす

手の能動性は神経心理学の成果からも証拠付けられている。大脳皮質の機能分担に基づき、われわれを囲む環境を peripersonal, focal extrapersonal, ambient extrapersonal という3つに分ける (図3 参照)。

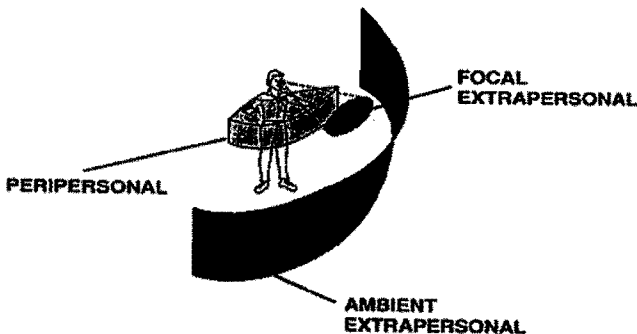


図3. The Model of 3-D Spatial Interactions (Previc 1998 : 125)

Peripersonal は左右対称である人体を中心に、左右 30 度、かつ 0-2m の空間を指す。この体と最も密接な関係を持つ領域では、手の動き (reach for, grasp, manipulation) が最も基本的な機能であると述べられている (Previc 1998)。これは手が他の身体部位が比較できないほど能動的であることを物語っている。この範囲内に自分の意志によらない他者の侵入は不快感をもたらすが、もっとも能動性の高い手の動きだけ異なる傾向をみせる。

6. 終わりに

本研究は、動作主の身体部位が着点になる動詞に着目し、手、そして手以外の身体部位を着点とする動詞は、意味拡張において異なる拡張方向を示すことを明らかにした。さらに、人間の縄張り意識、及び身体部位における手の優位性から、なぜこのような違いが生じたか、その原因を究明し、意味変化がこのような身体的基盤に影響されるということを明らかにした。本論で検討したことは、言語の身体基盤性を証拠付ける具体例になると考えられる。

謝辞

本稿の内容に関して、松本曜先生、岸本秀樹先生、田中真一先生に貴重なご意見やご指摘をいただいた。また秋田喜美氏、鈴木幸平氏、そして研究室の方々にも有益なコメントをいただいた。ここで深く感謝の意を申し上げたい。尚、本稿の不備は全て筆者に帰するものである。

注

1 扱う動詞の範囲に違いはあるが、Masica (1976)、仁田 (1982)、村木 (1983)、Hook and Pardeshi (2009)、夏 (2010) などにおいて、これらの動詞の特殊性について言及されている。

2 「着衣動詞」について、影山 (1980) などの先行研究では「主要的着衣動詞」と「二次的着衣動詞」(はめる、かける、結ぶ、巻くなど) という区別がなされてきた。ここでは「主要的着衣動詞」だけを指して使用する。

3 「摂食動詞 (ingestive verbs)」とは、先行研究では概ね狭義的な見方 (Newman 1997, 2009 など) と広義的な見方 (Masica 1976 など) の2通りの考え方がありようである。狭義の「摂食動詞」は、日本語の「食べる／食う／飲む」など、摂食行為に関係のある動詞 (以降は EAT・DRINK で表記する) だけを指す。一方、広義的なほうは Masica (1976) が代表的である。Masica (1976) では、ingestive verbs に関して、eat, drink の他に、hear, understand, read, learn, seeなどを挙げ、これらの動詞は物理的、或いは心理的に何かを吸収するという共通性を持っているとした。ここでは狭義の見方を取る。

4 「会う」は元々感覚動詞ではないが、「*友達に会ったが気づいてくれなかった」という文の非容認性から分かるように「<対面してお互いを認識する>」という意味要素が含まれており、他の感覚動詞との共通点が見出せる。

5 Reddy (1979) の導管メタファー (IDEAS (OR MEANINGS) ARE OBJECTS. LINGUISTIC EXPRESSIONS ARE CONTAINERS. COMMUNICATION IS SENDING) による。

6 言語の制約間に優先順位が設けられるという考え方は、最適性理論 (Optimality Theory: OT) (Prince and Smolensky 1993) にも見られる。

参考文献

- Bell, Charles. 1833. *The Hand Its Mechanism and Vital Endowments as Evincing Design*. London: William Pickering. (岡本保・訳. 2005. 『手』東京: 医学書院.)
- Gruber, Jeffrey. 1976. *Lexical Structures in Syntax and Semantics*. Amsterdam: North-Holland.
- Hook, Peter and Prashant Pardeshi. 2009. The semantic evolution of EAT-expressions: Ways and byways. In John Newman (ed.) *The Linguistics of Eating and Drinking*, 153-172. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.
- 影山太郎. 1980. 『日英比較 語彙の構造』東京: 松柏社.
- 北原保雄・久保田淳・谷協理史・徳川宗賢・林大・前田富祺・松井栄一・渡辺実 (編). 2000. 『日本国語大辞典』(第二版) 東京: 小学館
- 国広哲弥. 1997. 『理想の国語辞典』東京: 大修館書店.
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Masica, Colin P. 1976. *Defining a Linguistic Area: South Asia*. Chicago: University of Chicago Press.

- 松本曜. 2004. 「日本語の視覚表現における虚構移動」『日本語文法』第4巻1号, 111-128.
- 靱山洋介・深田智. 2003. 「意味の拡張」松本曜(編)『認知意味論』73-134. 東京: 大修館書店.
- 村木新次郎. 1983. 「迂言的なうけみ表現」『国立国語研究所報告』No.74 研究報告集4, 1-40.
- Newman, John. 1997. Eating and drinking as sources of metaphor in English. *Cuadernos de Filología Inglesa* 6-2, 213-231.
- Newman, John. 2009. A cross-linguistic overview of 'eat' and 'drink'. In John Newman (ed.) *The Linguistics of Eating and Drinking*, 1-26. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.
- 仁田義雄. 1982. 「再帰動詞、再帰用法—Lexico-Syntax の姿勢から—」『日本語教育』第47号, 79-90.
- Previc, Fred. H. 1998. The neuropsychology of 3-D space. *Psychological Bulletin* 124, 123-164.
- Prince, Alan and Paul Smolensky. 1993. *Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar*. Malden, MA: Blackwell.
- Reddy, Michael. 1979. The conduit metaphor: A case of frame conflict in our language about language. In Andrew Ortony (ed.) *Metaphor and Thought*, 284-324. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sweetser, Eve. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. New York: Cambridge University Press.
- Talmy, Leonard. 1996. Fictive motion in language and 'ception'. In Paul Bloom, Mary A. Peterson, Lynn Nadel, and Merrill F. Garrett (eds.) *Language and Space*, 211-276. Cambridge, MA: MIT Press.
- Talmy, Leonard. 2000. *Toward a Cognitive Semantics, Vol. I: Concept Structuring Systems*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 當野能之・呂仁梅. 2003. 「着脱動詞の対照研究—日本語・中国語・英語・スウェーデン語・マラーティー語の比較」『世界の日本語教育』第13号, 127-141.
- 夏海燕. 2010. 「「着点動作主動詞」から見る意味拡張の方向性」『日中言語研究と日本語教育』第3号, 56-66. 東京: 好文出版.

例文出典

- 青空文庫. <http://www.aozora.gr.jp/>
- 加藤祐一. 1873. 『文明開化』大阪: 積玉園.
- 現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ: Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese). 2009 年度版・モニター公開データ. 東京: 国立国語研究所.